

いたとき、三人で町はづれから野尻湖畔まで歩いたことがある。いつの間にか私は強歩、若き女性は駆け足、若き男性は緩歩と駆け足と小休止といった三人三様での競争をやって、息は私が最も平静だった。だからすぐその足で湖畔でふな釣りをやり、私は目の下八寸の大ふなを釣り上げられた。その晩、足がひきつりますよとおどされながら寝についたが、野尻湖ホテルで朝まで何ともなくグッスリ休めた。

— コムラガエリといえば、昨年冬、ブラジルで福井さんと同じ夜同じ時刻にコムラガエシをやり、明朝足をさすっていて、それを互に白状したことがある。コムラガエリは疲労もさることながら、気候と食物とその他がそれに関係して総合されたある状態に達したときに起るように思われる。—

強歩のくせは金沢時代についたようだ。時の学長、医学の大家が老化と遅歩の相関を言ったことから私の強歩がはじまった。それに私は、人間は老化するほどからだの輪郭がぼやけてくるように思う。ところで強歩は輪郭を絶対にぼやけさせない。つまり強歩は老化への抵抗であると思っている。だから子供のようなと言われると嬉しいのである。

片思いの無害の敵愾心を存分に燃やせる千歳烏山から自宅までの強歩六分距離は私には天恵である。

秀吉と気候

福井英一郎

突飛な表題でいささか恐縮ながら、ここでは豊臣秀吉と気候が直接に結びつくというのではなく、内容的にはむしろ“戦争と気候”とでも言った方がよいと思われるが、気候を巧みに利用した秀吉をとり上げてみたいのである。

古来気象と戦争はつきものであったようで、日本に例をとっても元寇の時の神風によるモンゴル軍の退散をはじめとして、川中島の合戦（霧）その他歴史上に多くの記録が見られ、比較的近い時代では日本海海戦（霧）を奉天大会戦（黄砂による風塵）などがあげられる。またこれとは逆に戦争によって気象学が進歩を早めたことも事実であり、天気図はクリミア戦争を契機としてフランスではじめられたもの、さらに今世紀の初めに気象学に革命的变化を与えたとされる前線論も、間接的とは言え、結局は第一次世界大戦の産物とも考えられよう、それは戦争のために外国からの気象情報を絶たれたノルウェイが自国内の観測網を極度に稠密化した時に偶然にも気温その他の特性分布が地上である線を境にして急変する事実が発見されたことに源を発している。前線の原語“front”という言葉それ自体が既に当時の軍隊用語であったことと考え合せて興味が深く、こ

れがさらに気団論へと発展したのである。さらに第二次大戦中に高層のジェット流が発見されたが、これとても戦争を重要な踏台とした高層観測の発達によって確認されたもので、気象衛星もその初めはドイツで開発されたロケット砲V2号に端を発している。また最近の台風の研究その他に高度に利用されている気象レーダーも勿論爆撃に対する防空目的から発達したもので、これだけを見ても気象学の発達が戦争といかに関係し合っているかが明らかであろう。しかしこれは事実をありのままに眺めたに過ぎず、決してこれによって戦争を肯定しようとするものではなく、学問の発達が少々遅れようと平和である方がよいに定まっているのである。

それでここで問題にしたいのはむしろ気候の方である。気象は比較的短い時間における大気中の個々の物理現象や毎日の天気の変化を対象としているから、戦争との結びつきと言ってもむしろ偶然的のことが多い。桶狭間の戦は大雷雨の中で勝敗が決せられたが、これは信長に幸した偶然のできごとであって、恐らく前々からこれを予測したことはなかったであろう。むしろまぐれ当りに近く、後で両者を結びつけられたものに過ぎない。

気候はこれと反対に、それぞれの土地についてそれまでの長い経験によってある程度までは既知の現象であるから、これを前もって戦争に利用することも可能であり、ここでその代表例としてあげたいのが秀吉による高松城の水攻めと賤ヶ嶽の合戦というわけである。まず高松城の場合は地形と気候の両者を巧みに結び付けたものであり、三方が沼、残る一方が堀によって囲まれていることと梅雨による増水季を利用して、長さ数軒におよぶ土堤で足守川の水をせき止め、城の周囲を水没せしめたものであり、これには高度の土木技術もさることながら、この辺一帯の気候についての経験的知識を基礎としたものであるから、前記のような単なる偶然に近い気象現象との合致とは非常に意味が異なってくる。勿論これは秀吉自身の創意というよりは黒田（孝高）、蜂須賀（正勝）など側近智謀者の献策によったものと考えられるが、その採否は秀吉によって決められたのであるから、やはり彼の智略とすべきであろう。

賤ヶ嶽の合戦には江北の深雪地帯が重要な鍵となり、ここでは冬の間大軍の機動力が極度に制約される事実が秀吉方にも柴田側にも十分に予知されていたため、冬を前にして外交のかけ引きが行われ、一旦は和平が成立して柴田側が安心していた裏をかき、賤ヶ嶽までおびき出して一挙に勝敗を決したのであった。深雪地帯を間に挟んでの戦のかけ引きについては実は既にこれより前の時代に、上越国境の南北における北条・上杉の攻防や信越地方での武田・上杉の対立などにその先例が見られ、戦争と気候の好例と言ってよいであろう。その後の内外の戦争についても幾多の例を見出すことができるが将来は地上のみでなく、上層の気候も重要な意味をもってくるであろう。梅雨時の雨に閉じこめられ、意外の方向に話が飛んで行ったが、最近における随想の一端を書かせていた

だいた次第である。

ジャワ女性の性格

別 技 篤 彦

これは私がインドネシア人から聞いたジャワの「原始女性」誕生の物語である。

(註一)

一 ヴィスヌの神は天上の神々を創造したあと、地上で新しい生きものを作ろうと考え、まず最初の男性ブルワニン・ジャンを創り出し、これを庭のほとりの池のそばに立たせてみた。しかしただ一人ではいかにも淋しそうなので、その相手をもう一人作らなければならぬと思った。あたりを見廻すとヴィスヌの神の眼には、さし昇る朝日の光に照らされた池の美しい蓮の花が映った。「これは美しい。ひとつこれからもう一人の人間を作ってみよう。」神が命ずると池の水面は震え蓮の花は最初の女性となって現われた。そこで神はこういった。「おまえは今までは池の花だったがこれからは人間の花になるのだ。アブ・ハワという名前を与えよう。そこで、今おまえの一番望むことは何か?」「私はどこに住んだらいいのでしょうか。少しの風でも私は恐ろしいのです。どうかよいすみかをお与え下さい。」「おまえは高いスメルの山の上に住みたいか?」「スメルは美しい山ですが、寒さが恐ろしゅうございます。」「この国は海に囲まれている。海のなかに美しい家を建ててやろうか。」「でも海にはあらしがあり、海蛇がいます。」「ではテンゲルの砂原はどうか。」「砂のあらしが私を埋めてしまうかもしれません。ヴィスヌの神は困ってしまったが、彼はもう一人の人間ブルワニン・ジャンのことを思い出しアブ・ハワに言った。「人間の花よ。いいすみかを見つけた。このブルワニン・ジャンの心の中こそおまえが安心して住める場所にちがいない。ちょっと中をのぞいてごらん。」アブ・ハワは神の命ずるままにブルワニン・ジャンの胸に顔をおしつけてみた。すると彼女の顔はたちまち蒼白となり、体がふるえた。「人間の花よ。どうしたのか。」「神よ。この人の心の中には、冷たさ、あらし、暗黒な洞窟などのほか何にも見えません。」この時、神は、おごそかに教えた。「人間の花よ。それは心配することはない。この男の心に冷たさがあれば、おまえの呼吸で温ためてやれ。あらしがあれば、おまえの愛でそれを吹き払え。暗い洞窟があらわれたらそこを照らす光となってやれ。それがおまえの仕事なのだ。」こうして二人の「原始人類」は結び合うことができたというのである。私はこの話を聞いた時、大へん感動したものだ。というのはジャワの各地方には昔からその女性の性格の特色を伝えるいろいろな言い伝えが残っているが、よい女性の資格としては一様に「やさしさ」を強調しているからなのである。たとえば中部ジャワの女性は今までもバドマサリ、アレダシ(微風にゆらく蓮の花)とよばれ、情深く、やさしい心の持主でよい家庭の主婦となるといわれている。「中部ジャワの女? ああ、いい人